海外で働くということ-獣医学科の設立-

今回、麻布大学小動物臨床研究室の斑目 広朗教授にお話を伺いました。教授は数回にわたり海外へ仕事や留学に行っており、２０数年前にはザンビアの大学で獣医学科の設立のための１年３ヶ月に及び仕事をしていました。今回はそのザンビア大学でのお話を聞きました。

ー獣医学科設立の仕事に参加するきっかけは何でしたか？ー

２０数年前、僕は北里大学に教員として所属していたのだけれど、大学で関わっていた先生からそのころに行われていた「ザンビア大学に獣医学科をつくる」というプロジェクトに参加しないかと誘われ、前々からアフリカに行ってみたかったというのもあってプロジェクトに参加しようと思ったんだ。

ーザンビア大学での活動内容を教えてくださいー

ザンビアにはJICA(日本国際協力機構)の一員として行くことになり、ザンビア大学では獣医師の育成のために現地の学生へ英語での病理学講義、教官候補生や技師への獣医としての技術の移転、その土地での牛の病気などの研究が主な活動かな。ザンビアにはもともと獣医大学がなく、獣医師の数も不足していた。全国で７５名しか獣医師がおらず、そのうちザンビア人は１２名しかいなかったんだ。そこで、今回みたいに他国から専門家などを呼んで学生に指導をしたんだ。英語での講義なんだけれど、学生たちからは英語の発音が分かりにくいと言われながらやっていたよ(笑)。あと、授業の教科書の入手が困難だからテキストを自転車操業で手作りしなければいけなかったね。

研究で牛の病気などはやっていたけれど僕自身は生徒の指導が中心だったかな。

ーザンビアといった海外での活動は日本と違い大変ではなかったですか？ー

ザンビアに行く前に市ヶ谷で向こうの情勢を学んだり、研修を受けて行ったし、ザンビア大学には立派なオフィスがあって仕事では困ることは無かったね。日本の他の大学の先生方も来ていて、日本人のコミュニティも出来上がっていたし、現地の人もとても友好的で慣れるまで親切に助けてくれたからやりやすかったよ。ただ、ザンビアは特定不健康地域になっていて生活の方が大変だったよ。特にそこらへんで水を飲むとおなかを壊してしまうから、蒸留したり、とにかく水の確保は生活に関わるからね。あと、治安が悪い国ではないんだけれど、やっぱり日が暮れてから外に出るのは怖いかな。向こうにいたときは外食をした時でも夕方までしか外には出ないように気を付けていたよ。

ー学生の海外留学への意見を教えてくださいー

学生の海外留学は賛成だね。昔と比べて今は海外へも行きやすいし。でも、重要なのは海外に行くことではなくて、何を目的として海外に行くかだね。海外に行けば自分の知らないことが分かるけど、ただ単に行ったとしても何かが大きく変わるわけではないから、ちゃんと目的をもってその目的のために行動をするべきだと思うよ。

あとがき

まず、ご多忙の中お話をして頂いた斑目先生、大変にありがとうございました。私自身は獣医学生として海外での活動を実際にしたことがなく、今回のお話で自分がただ漠然と海外に目を向けているような気がしました。何を目的としたいのか、すべきなのかを考える良い機会となり、今後の指針と出来たらよいと思います。　執筆：閑　弘之